

大学の図書館

第40巻第1号 (No.566)

2021 1



目次

特集：新しいスタートに当たっての今後の抱負

大図研の新しいスタートに際して	呑海 沙織	2
これまでとこれからと	赤澤 久弥	2
名称変更と次の全国大会について思うこと	磯本 善男	3
新しい年と新しい「大図研」を迎えて	上村 順一	4
大図研の再スタートに際して	青山 史絵	4
編集活動を通して	北川 正路	5
これまでとこれからの大図研に寄せて	小山莊太郎	5
新しい大図研の船出にあたって	澤木 恵	6
自分にできることを	柘植久美子	7
前進の年を迎えて	中筋 知恵	7
共に考える場として	西脇亜由子	8
大図研の新しいスタートに寄せて	渡邊 伸彦	8
次の50年に向けて	和知 剛	9
北海道地域グループの抱負	得能 由貴	9
会員と埼玉地域グループのこれから	鈴木 正紀	10
千葉地域グループの今とこれから	加藤 晃一	11
変わるもの、変わらないもの -大図研名称変更によせて、東京地域グループから-	下山 朋幸	11
これからの新しい一歩-東海地域グループとして-	中川恵理子	12
京都地域グループの今までとこれから	安東 正玄	12
大阪地域グループのこれから	小村 愛美	13
兵庫地域グループの再スタートとこれから	井上 昌彦	13
一歩一歩ゆっくと-広島地域グループより-	楳 幸子	14
これまでとこれからの九州地域グループ	柿原 友紀	15
「研究グループ」の目指すもの	田辺 浩介	15
地域文化研究グループの今後に向けて	中島 慶子	16

特集：新しいスタートに当たっての今後の抱負

明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

さて、大図研は、略称こそ「だいとけん」のままですが、会の名称が「大学図書館研究会」と改められました。大図研は新しいスタートラインに立った、とも言えるかと思います。

このタイミングで、委員長・副委員長・事務局長・常任委員に加え、各グループに、「新しいスタートに当たっての今後の抱負」という観点でご執筆をお願いしてみました。

本年が皆さまにとってよい1年でありますよう祈念しております。また、皆さまの会報である『大学の図書館』も、よろしくお願い申し上げます。

(担当：常任委員会報編集小委員 上村順一)

大図研の新しいスタートに際して

委員長 呑海 沙織

2021年より本会は、図書館員等による大学図書館および学術情報にかかわる問題提起とその解決という意味での「研究」をより鮮明にするため、大学図書館問題研究会(The Japan Academic Librarians' Association)から大学図書館研究会(Japanese Academic Library Association)と改称することとなりました。略称は変わらず、大図研(だいとけん)、dtk(でいーていーけー)です。

大図研の名称については、2012年の「大図研の今後を探るつどい」において提起されて以降、常任委員会、全国委員会、会員総会において、議論を重ねてきました。2020年5月5日から6月20日にかけて、この提案に関する意見をいただく機会を設けてさらに議論を重ね、最終的には2020年10月10日に開催された五十周年記念大会である第51回全国大会(オンライン大会)の会員総会にて可決されました。

大学図書館問題研究会は、1970年に発足されました。1969年、大学図書館員有志によって「大学図書館の問題を語る集い」が開催され、同年9月に「大学図書館の問題を語る会準備会」が発足、11月に「大学図書館の問題を語る会」の初会合が行われました。

翌1970年10月に東京で大会が開かれ、大図研が結成される運びとなりました。同大会では、綱領や会則、交流、研究・調査を中心とする本会の活動方針が定められました。

創設五十年の節目に改称することとなった大図研は、全国の大学図書館員を中心とし、地域グループおよび研究グループを中心に活動している研究会です。SNSなどを活用してゆるやかなつながりが可能になった現在、会費を払い、会員として参加する大図研の意義を改めて考える必要があります。地域グループや研究グループ、全国大会などでの発表、今般デジタル頒布されることになった出版物への寄稿のみならず、マネージメントを実践する場として、それぞれの会員がそれぞれの形でより参加しやすい会にすることができればと思います。

(どんかい・さおり／筑波大学)

これまでとこれからと

副委員長 赤澤 久弥

20年ほど前、京都で行われた全国大会に、職場の先輩に声をかけてもらって参加したのが、大図研との関わりの始まりでした。そして、京都支部(現京都地域グループ)の委員、

その後には常任委員をさせていただいており、今年度は副委員長を務めることになりました。振り返ると、各地での全国大会の様子、京都支部の企画、また、大図研スキーツアーなども、懐かしく思い出されます。なにより組織や世代を超えた会員との出会いがありました。自らが組織運営をお手伝いする側に回ってからも、様々な立場や思いを越えて取り組みを形にすることは、得難いことだと感じております。

昔語りのようになってしまいました。さておき、こうして大図研に関わってきたわけですが、どのように大図研と付き合うかはそれぞれだと思います。自らの成果を発表する機会とすること、イベントや会報などから新しい情報を得ること、いろいろな人とつながることもできます。また、そうした大図研のあり方も、きっと同じままではありません。50年の歴史の中で、今回名称変更などの変化があったわけですが、これまでの記録を辿っても、ときには運営のあり方を自ら大きく変化させてきましたし、世の変化につれて変わってきていることもあるように感じます。昨年来のコロナ禍に伴う全国大会のオンライン開催、またオンライン交流会の取り組みなども、そうした変化です。

ともあれ、私は、こうして組織として変化していくこと自体に、意味と意義があることと感じています。今後、20年先、50年先に大図研がどのようなになっているのかは、誰にも分かりません。しかしながら、会員としてあることは、大図研のあり方の一端を数百分の一でも、自律と責任の下に担っているのではないかと感じています。そうしたことを思うとき、これまで続いてきた大図研を次に引き継ぐためのお手伝いを少しでもできればと思います。

(あかざわ・ひさや／大阪大学附属図書館)

名称変更と次の全国大会について 思うこと

副委員長 磯本 善男

大図研の名称変更という転機の年に、副委員長という役職を拝命しました。名称変更については、かなり長い間議論がされてきました。名称変更の議論を見ていて、本当に様々な意見があるのだな、と実感しました。それと同時に、名称について様々な意見はあっても当会の目的が大学図書館の発展にあることに変わりはない、ということ強く感じました。

副委員長の職ともう1つ、第52回全国大会の実行委員長も担当させていただきます。私は2015年の第46回全国大会（札幌）の時にも実行委員を務めさせていただきました。その際には、北海道支部（当時）でご一緒だった札幌医科大学の今野穂さんにも多大なご尽力をいただきました。今野さんとの打ち合わせを何回もやりましたが、その時に名称変更について議論（とは言えない酒の席での雑談）をしたりもしました。今野さんは大図研の名称にはかなりのこだわりを持っておられたので、ご存命だったら名称変更についてどのような意見を出されただろうか、と今でも考えたりします。

第52回全国大会は、現時点では実地開催になるのか第51回大会のようにオンライン開催になるのかは決まっておりません。初のオンライン開催となった今回の東京大会を経験して、オンラインであっても全国の会員の皆様が顔を合わせる機会は絶対に必要だと改めて思いました。どのような形態であっても「大学図書館研究会」として最初の全国大会を成功させたいと思いますので、皆様のご協力をお願いいたします。

COVID-19は私たちの生活様式を完全に変わってしまいました。ランガナータンの五法則の5番目は「図書館は成長する有機体である」です。生活様式は変わっても、情報を記録する媒体が紙から電子に移行しても、大学図書

館は成長しながらその責務を果たしていかなくてはなりません。大学図書館研究会がその一助になれるよう、尽力していきたいと思えます。

(いそもと・よしお／千葉大学附属図書館)

新しい年と 新しい「大図研」を迎えて

副委員長・事務局長 上村 順一

誠に遅ればせながら、明けましておめでとうございます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。

昨秋開催された会員総会の審議結果を受け、略称は「だいとけん」のままなるも、今年から、「大学図書館研究会」と名称が変わった。このような、大図研史的に大きな転換点に、事務局長として携わったことに、やや怯みも感じている昨今である。

お恥ずかしい話だが、名称が変わったはよいものの、実は自分自身もまだ慣れておらず(すみません)、メールにしてもしゃべるにしても、ついつい旧名称が出てきてしまっとうっかり、という場面に遭遇することしきりである。意識して、そして計算機のFEPにも一生懸命、新名称を覚え込ませているところである。

折しも、名称変更とともに決議された、大図研出版物のデジタル化で、関係する業務の組み立てを再考することが急務である。出版部(事務局出版担当)とも連携しつつ、会員のみならず、大図研会員でない、会報会誌をご購読くださる方々、すなわち大図研の活動に興味関心を持ってくださる方々に、大図研という存在を引き続きお届けするべく努力していきたい。

名称を変更したことで、どのくらい社会に影響を与えたのかは後世が示してくれるものだが、そのことを理由として会務を滞らせる訳には参らず、よりの確に正確に精緻に会務

を行いつつ、せっかくの機会なので、名称変更を契機に、大図研を広く知らしめ、ひいては会員増にも繋がる活動をしていきたい、とも考えている。

名称変更とはリンクしておらず恐縮だが、前任の高井事務局長から、2015/2016年度に事務局長職を引継ぎ、5年が経過したところで、今年度からは副委員長職をも拝命することになった。この5年間、当方としては懸命に、会員のため、また会務を担う全国委員のため、そして常任委員のため、尽力してきたつもりである。その成果は会員が評価するものであり、わたくしとしては合理性を追求してきたものの、やり過ぎて、会員各位にご迷惑をおかけしている場面もあろう。会務の進め方について、会員各位より忌憚のないご意見を頂戴したい。

事務手続きの手法についての検討、改善をしている立場から、大図研全体を俯瞰し、よりよい大図研の活動を進めるべき立場も加わったことになるのだが、さて両立できているかと言えばなかなか怪しい。アタマと気持ちを切り替え、事務局長の立場、また副委員長の立場で、俯瞰もしつつ会務に当たっていききたい。

(うえむら・じゅんいち／

国立情報学研究所)

大図研の再スタートに際して

青山 史絵

事務局組織担当をしております青山と申します。会員の皆さまにはいつも会務にご協力頂きまして誠にありがとうございます。

組織担当者として、今後の抱負をお伝えすることを重く受け止めつつも、大学図書館研究会となって初めて刊行される会報に寄稿できることを衷心より光栄と感じております。

取り組むべき課題、抱負は大小様々ありますが、今後実現したいことを2つに絞ってお

伝えたいと思います。まず一つ目は会員増です。大学図書館研究会の会員数ですが、2021年1月20日現在367名となっております。500名を超えていた時期があったことを耳にしていますが、その頃と比較すると約3割減という残念な状況となっております。ぜひ切磋琢磨できる仲間を増やしたいところですが、全会員の皆さま、一緒に考えて頂けませんでしょうか。一人一人思うところがありかと思えます。出版物の内容をもっと読み応えのあるものにすれば良いのではとお考えの方、ぜひ読み応えのある記事をご寄稿ください。入会するほどの魅力が今一つとお考えの方、どんな魅力があればぜひ入会すべき！とご友人を勧誘したくなるか教えてください。この先更に50年、末広がりで行けるよう、大図研と一緒に育てていきましょう。

もう一つは、有意義な研究活動を可能とする組織の安定的な運営です。会員の入退会、会員情報の更新など、基本的なことですが、会員の方々やグループの活動に滞りやご不便をおかけすることがないよう、迅速・着実に対応していきたいと思えます。

これらを実現するためには、会員の皆さまからのご連絡を受け身で待つだけでなく、会報等で定期的に会員情報変更時の手続きについてのお知らせを出したり、会員情報の調査を行ったりと積極的な関与が必要となります。願わくは、サポートして下さる方がお一人、お二人でも増えると嬉しいところです。一緒にやって下さる方、ぜひご一報ください。お待ちしております。

(あおやま・ふみえ／

東洋英和女学院大学図書館)

担当することになりました。

会報『大学の図書館』、会誌『大学図書館研究会誌』は、全国に散在する会員が、大学図書館に関する経験や調査、考えを発表、共有し、意見交換をすることができる場を提供しています。2021年からは、会報、会誌はデジタル版での頒布が開始され、アクセス者や読者層にも変化が生じると考えられます。新しい頒布方法が有効に活用されるように考えていきたいと思っております。

記念出版物は、2020/2021年度内の刊行が予定されております。記念出版物編集は、大図研の歩みを追うことのできる貴重な機会であり、記念出版物編集小委員会、常任委員会の皆様からご教示いただきながら、小委員会の委員長としての役割を果たしていきたいと存じます。

50周年記念の全国大会（2020年10月）では、各議案、大図研の名称変更、会報・会誌のデジタル化・業務委託化に関する審議、新シンボルマークの紹介を通して、「大図研50周年」には、多くの方々の思い、働きが詰まっているものであること、会員の間で様々な印象がもたれていることを実感しました。大学図書館員が集まる組織はいくつかありますが、それらの中でも、大図研が、館種や経験、専門知識の粋をこえて会員を引き寄せる力についても、記念出版物編集を通して探していきたいと思っております。

どうぞよろしく願い申し上げます。

(きたがわ・まさみち／

東京慈恵会医科大学学術情報センター)

編集活動を通して

北川 正路

このたび、常任委員会にて、会報編集、会誌編集、五十周年記念事業記念出版物編集を

これまでとこれからの 大図研に寄せて

小山 莊太郎

これまでの大図研を振り返る時、個人が自由に参加する研究会としての大図研の存在意義はやはり大きいと感じている。組織で業務

の一環として行われる研修や会合とは別に、個人として全国大会や研究集會に集い、大学図書館について自由に議論し情報を交換する、大図研はそのような場を担ってきたと思う。私の会員歴は5年に満たないが、国公私立の設置種別、所在地などの垣根を超えて、大学図書館に携わる実に多くの方々に大図研で接してきたことは、とても有難い経験だと改めて思う。

そんな大図研においても、地域グループの所在地や大都市部などの会員の多い地域と、会員の少ない地域とが存在していて、この状況は日本社会全体の地域間格差を反映した、長期的で難しい問題だと感じている。勿論大都市部以外からの参加は、遠距離での行事参加といった困難な面も存在するけれども、同時に地域を超えたメーリングリストでの情報交換やオンライン行事の利点も大きい。大都市部以外の地域で働く一人として、多様な地域の図書館員にとって魅力的な研究会とは、という点は今後も考え続けていきたい。

もう1つこれからの大図研で重要な要素を挙げるならば、国を超えた国際交流や国際的な視点ではないかと思う。ACRLではどのような議論が行われているか、あるいは例えばドイツでは、カナダでは、韓国では…。英語名称の変更に際して、私は世界の大学図書館員の研究団体をほとんど知らないということを感じさせられた。語学も不得手で恥ずかしいけれども、幸い大図研には世界の動向に詳しい会員の方も多いため、まずは反省しつつ大図研で世界のことについても広く学びたい。

大学図書館に携わるあらゆる個人が自由に参加できる研究会である、という大図研のこれまでの良さを活かして、これからも大図研が更に多様な人々の参加する場としての役割を果たせるように、常任委員として担当の仕事を少しずつでも進めていきたいと思う。

(こやま・そうたろう／三重大学附属図書館)

新しい大図研の船出にあたって

澤木 恵

事務局会計担当としてお世話になっております、澤木と申します。会務の皆様と直接関わる機会はほぼありませんが、お預かりしている会費の適切な執行、管理のお手伝いをさせていただきます。

昨年は、公私ともに、様々な場所で変化に立ち会った一年でした。大図研の事務局会計担当としては、初めて会計監査をオンラインで実施することとなり、合わせて、これまで以上に積極的に領収書等の伝票ペーパーレス化を推し進めていくこととなりました。また、常任委員会や全国委員会も基本的にオンライン開催となったことで、会場費や交通費が大幅に削減され、予算編成にも変化がありました。詳しくは、全国大会に合わせてweb公開されていた議案書PDFファイル、または議案書号(2020年12月号)にてご確認ください。

毎年、大図研では、会員の研究活動の助けとなるよう、「研究活動費」を予算として計上しています。この中には、会員の研究活動の基盤として2016/2017年度より新設された「研究グループ」の助成金も含まれます。研究グループには、居住・勤務している地域を問わず同じ事柄に興味・関心を持つメンバーが集まり、2020/2021年度は2グループが長期的研究グループとして活動しています。もし、ご自身の興味・関心に合うグループがない場合、仲間を募って新たにグループを立ち上げることもできます。せっかく入った大図研です。一步踏み出してみませんか。詳しくは、大図研ホームページ内、「研究活動」をご覧ください。

本会の名称は変わり、オンライン化は恐らくコロナ後も進みますが、会計担当としての仕事の大枠は変わりません。でも、これを機に研究活動が活発になり、毎年計上されている「研究活動費」の予算オーバーに悩むような未来が訪れたら、と、ひそかに思っており

ます。

(さわき・めぐみ／東京海洋大学)

自分にできることを

柘植 久美子

特定常任委員の柘植と申します。広報小委員会の一員として、大図研ウェブページの更新を担当しております。

この度の大図研の大きな変革にウェブページは深く関わっています。会報のデジタル化・公開により、大図研ウェブページの位置付け、重要性はこれから大きく変わることでしょう。これまで自分は、ウェブ担当として、前任の方々が作り上げてくださったものを現状維持し、前例踏襲を基本に、ルーチンの決まった箇所のみを更新してきました。しかし、それだけでは、これからの大図研の変革についていけないことは間違いありません。大図研の変化に合わせたウェブページの再構築に、自分が何をすべきか、何ができるかを考え、少しでも貢献したいと思います。そのために、依頼された箇所をただ更新するだけでなく、どうすれば見やすく分かりやすいウェブページになるか、改善の余地はないかを考えながら、更新・編集するように心がけたいと思います。

大図研の変革期に常任委員会に所属し、変化を近くで感じられる幸運に感謝しています。微力ではありますが、自分にできることを考え、大図研の発展のために少しでも役に立ちたいと思います。

(つげ・くみこ／群馬大学)

総合情報メディアセンター理工学図書館)

前進の年を迎えて

中筋 知恵

このたび2021年1月号に寄稿させていただくにあたり、大図研の名称変更・新生名称での出発という記念すべき時期に巡り会えたことを大変嬉しく思います。

今期は「広報小委員会」および「海外図書館研修ツアー小委員会」のメンバーとして活動する機会をいただきました。それぞれの活動について以下のとおり自分なりの所感を述べさせていただきます。

「広報小委員会」では、ホームページやSNSを通じて会員の皆様への迅速な情報提供をできるよう、今後もいっそう努めて参りたいと思います。ホームページについては、迅速であることと同時に、便利さ簡便さを目指して工夫を重ねてゆきたいと思っております。

また、自分にとっての大図研の活動は弛みない研鑽の場でもあります。幸いにも大図研には様々な分野で卓越した先達の皆様が大勢いらっしゃるもので、自分としては特にWeb技術やシステム関係の分野で皆様から知識をいただき教えていただきながら研鑽を積んでゆきたいと願っております。

「海外図書館研修ツアー」については、新型コロナウイルス感染拡大の影響で2年延期となりましたが、現在も訪問地のイギリスはじめ世界中が予断を許さない状況です。ツアー実施可否の判断は今年の夏ごろと考えていますが、なによりもまず安全性が確保されることを重視し慎重に状況を把握しながらツアー実施可否を検討してゆきたいと思っております。

2021年は会報のデジタル化も実施され、大図研の活動が大きく前進する年になると思います。オンライン化が進む中でもZoomを通しての交流会が開催され、会員の皆様との交流を楽しめることは大変ありがたく貴重なことだと実感しております。今年も、人との

つながりの大切さを噛みしめながら、大図研の活動を楽しんでゆきたいと思います。

(なかすじ・ともえ／

小樽商科大学附属図書館)

共に考える場として

西脇 亜由子

2020年に50周年という大きな節目を迎えた大図研だが、2020年という年は、大図研のみならず、全世界で劇的な変化の契機となった年として後世にも記録されるのではないだろうか。大図研は、2021年からまた新たな名称のもとで動き始めることとなるが、現在、常任委員として研究企画小委員長を務めさせていただいている立場から、ご挨拶も兼ねて今後の取り組みへの思いを以下述べたいと思う。

研究企画小委員会では、「大図研オープンカレッジ(DOC)」を年1回開催しているが、近年は、地域グループ、研究グループとの共催という形で、様々な地域での開催に展開してきた。DOCは、オープンカレッジという名の通り、大学図書館と情報技術との関わりに関連したテーマで企画を行い、広く会員外にも呼びかけるもので、より高度で専門的な知識・技術を習得することを目的としている。そのときどきで取り組むべき課題として意識されつつある「半歩先行く」テーマを設定することで、会員・非会員を問わず共に考え経験する場を提供してきたのではないかと考えている。

今後も引き続きDOCを実施していきたいと考えているが、昨年は初めてのオンライン開催によって、「地域開催企画の参加や集客の難しさ」という長年の問題が一気に解決してしまった。今後、感染状況が収まるまではオンライン開催が中心になると思うが、平常化した暁にはオンライン開催だけでなく、リアル集合とオンライン同時配信といった形

式も増えるだろうし、そうした場合の会場設備やネットワークの設定、リアルとオンラインそれぞれの参加者への対応方法や経費の問題にも取り組む必要が出てくるだろう。

DOC開催以外にも、研究企画小委員会では地域グループや研究グループをはじめ、会員の皆様の研究活動を支援するため、他の小委員会と連携して活動していきたいと考えている。大学や組織の枠組みにとらわれず大学図書館にまつわる課題を共に考えていく場として、ぜひ大図研を活用していただきたいと願っている。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

(にしわき・あゆこ／明治大学図書館)

大図研の新しいスタートに寄せて

渡邊 伸彦

大図研が50年という大きな節目を超えて、また大学図書館研究会という新しいスタートを切ったこの時をみなさんと共に迎えられたことを、素直にうれしく思います。それぞれが大図研という集まりを考え、来し方を顧み、行く先を想うことで、それぞれの中での大図研も自ずと新しくなったのではないかと考えております。

私にとっての大図研を考えれば、職業人として人生の多くの割合を充てることとなった際に、先輩にお誘いいただき関わることとなり、以来、支部委員や一会員、近年はお手伝い程度しかできておりませんが常任委員の末席を汚しながら様々な経験をさせていただいたと同時に、共に大学図書館に関わる様々な人の考えやトピック、取り組みなどを勉強させてもらえる稀有な場所だと考えています。これからも大学図書館を専門に取り扱う唯一の職能団体として、大学図書館の進化と大学図書館職員の職能向上に寄与できればと思います。

世間を見れば新型コロナウイルス感染症に

より日常を脅かされ、どこの大学図書館も等しく対応に追われる危機的な状況に直面されているかと思います。我々自身の健康も、学生・教職員の健康も危険にさらされる中で、大学図書館という存在を機能として捉え、我々に何ができるのか、そして我々がどうなっていきたいのか、共に考えていく機会を持てればと思います。

私事となりますが、昨年4月に人事異動で現職に就きましたが、ちょうど10年ぶりに戻ってくる形となる部署でした。当時と課名掛名は変わってしまっていました。業務の大半は見知ったもので、しかし私がやるべき仕事は、コロナのこともあり、大きく変わりました。10年前も大学図書館の大きな変化が重大な課題意識として喧伝されていました。変わらず続くものと変わっていくもの、変えていくものは、いつもそうと区別できずに、それでも必死に対応していく中で進んでいったと感じます。おそらく、これからもそうやって懸命に対処しながら次の10年につないでいくのだと思いますが、少しでも良いものをつなげていけるように努力したいと改めて肝に銘じたところです。

(わたなべ・のぶひこ／京都大学附属図書館)

次の50年に向けて

和知 剛

2021年もよろしくお願ひ申し上げます。

大学図書館研究会（旧名称：大学図書館問題研究会）は2020年に創立50年を迎えました。50周年の記念事業として、団体名の変更を含めた、様々な変革が次の50年に向けて実行に移されています。わたしも常任委員会の一員として、新しいシンボルマークの選定、会誌における査読制度の確立などに携わりました。正直なところ、この変革に関わる事項は、どれをとっても困難が伴う事業でありました。これを形にすることができたのは、

ひとえに大図研会員各位の協力と支援あつてのことです。ここに篤く御礼申し上げます。

「ゆく川の流れば絶えずして、しかも元の水にあらず。淀みに浮かぶうたかたはかつ消えかつ結びて、久しくとどまりたるためしなし」一口に「50年」と言っても、わたしが1965年生まれで大図研は1970年生まれ、わたしは5歳の頃のことをほとんど覚えていません。ときに館種を問わず「図書館」という施設は、おのおのが時の流れを検証するために存在するものでもあるわけで、そこには「1970年」あるいは「2020年」という時間が刻んだ社会の有り様、また変容が記録され保存されているはず。それは、わたしにいつかは「1970年のこんにちは」として振り返られるものであり、次の50年が過ぎたときに2020年は「危機の2020年」と振り返られることになるのかもしれない。危機が危機として振り返られるとき、「図書館」は振り返るひとたちに十分な記録と記憶—世の中にあるひとと住処と—を伝承することができるのかどうか、わたしたちはその50年の端緒にいる、と考えることも可能でしょう。

次の50年に向けて、いま図書館に関わっているわたしたち、これまで図書館にたずさわってきた方々、そしてこれから図書館に対峙しようとしている（若い）ひとたち、それぞれがそれぞれの立場で図書館に絡んでいく、その取り組みの補助線として何かを提供し続けることのできる存在として大学図書館研究会が次の50年を歩んでいく、その基盤を形作のお手伝いが、恐らくわたしにできることです。重ねてどうかよろしくお願ひいたします。

(わち・つよし／郡山女子大学短期大学部)

北海道地域グループの抱負

得能 由貴

大学図書館研究会としての、新たなスター

トをお祝い申し上げます。

北海道地域グループ（以下、当グループ）が北海道支部と呼ばれていたころ、最盛期には30人以上のメンバーがいたそうですが、2021年現在では12名となってしまいました。一人一人のお話をよく聞けるなど小規模なりのメリットもありますが、やはり新しいメンバーを増やしたいという思いがあります。そのためには楽しく実りのある活動をもって、道内の大学図書館職員へアピールすることが必要だと考えています。

ここ数年間、当グループではイベントをあまり企画できていませんでした。他の地域グループから流れてくるイベントのお知らせを見ては、「うちでもこんなことができたらいいなあ」と思うばかり。ネックとなっていたのは、講師を北海道に呼ぶための費用がかかることと、道外からの来客が期待しづらい土地で十分な集客ができるかということでした。しかしコロナ禍でオンラインイベントが主流となったことで、凶らずも上述の問題が解消されました。オンラインにはオンラインなりの苦労があることではありますが、この機会に何とかイベントを企画し、全国各地の会員に参加いただくとともに、非会員の方々に大図研と当グループの魅力を感じてもらうことができればと思います。

またオンライン主体となったことで、当グループのメンバーも様々なイベントに参加できるようになりました。最近の例会は事務的な内容が多くなっているのですが、これからは各自の参加したイベントや研修についての情報交換を増やし、例会に参加するだけでも情報収集に役立つということをPRポイントにしていければと思います。

目指せ30人超え！

（とくのう・ゆき／北海道大学附属図書館）

会員と 埼玉地域グループのこれから

鈴木 正紀

埼玉地域グループ（旧埼玉支部）は、1990年に東京支部から分離独立するかたちで設立されました。ちょうど、常任委員会が関西から関東に移ってくるころのことでした。常任委員会の移動と支部設立の関係については現時点ではもはやよくわかりません。が、関東地域の5支部（東京、神奈川、千葉、埼玉、群馬の各支部）から常任委員を出すことで運営してきた時代には、（全国委員はもちろんですが）支部から常任委員を出してきていました。

支部活動は決して活発とは言えなかったように思いますが、それでも2000年代を中心に、県内の学校図書館との合同例会を継続的に開催し、相互交流に努めてきたことは特記しておいていいかもしれません。

現在は、15名の会員が所属しています。支部から地域グループへの移行の際、何人かとは、「『会員の居場所』としてとにかく維持していこう」といった話をした記憶がありません。

このたび、大図研は組織名称の変更という、大きな節目を迎えました。ただ、これによって現在所属している会員の意識や行動が影響を何等かの受けるということはありません。近年は、年初に開催している関東地域グループの共催団体として名を連ねているくらいで、めだった活動はありません。

それよりも、どんなものであれ「研究会」というのは、個々人が自らの意思で参加し、自分にとってのベネフィットを得ることが基本にあるように思います。とりあえずそうしたスタンスで大図研のこれからというのを考えると、会員にとってそうした場として大図研がありうるということであり、そのもとにある地域グループは、それが存在することでもし会員の活動になんらかの貢献ができるのであれば、とりあえずそれで十分な

ではないかと思えます。

(すずき・まさのり／文教大学越谷図書館)

千葉地域グループの今とこれから

加藤 晃一

「大学図書館問題研究会」が「大学図書館研究会」に改称して新たにスタートするにあたり、千葉地域グループ（以下、千葉地域G）の今を振り返ると、その実情といえは新型コロナウイルス感染症禍（以下、コロナ禍）において休眠状態といっても過言ではない。関東地域グループ合同例会には参加してはいるが、千葉地域G独自の活動としては『大学図書館問題研究会誌』の無料配布は継続しているものの、例会は2019年11月の仙台ツアー以来、1年以上動きはなく総会も開かれていない。大図研の全国大会やZoom交流会への参加も低調である。コロナ禍の中、グループ長の定年退職と全国委員である加藤が緊急事態宣言下の千葉県に戻れない（新潟県や職場からの強い自粛要請で実際5か月帰れず）といったことが重なり、またメンバーから総会や例会等の活動について、多少の意見は出たものの行動には移れずに停滞が続き、まさに千葉地域Gそのものがコロナ疲れに陥っているような状況である。

これからを考えると、大図研が改称するにあたっての抱負以前にまずは活動を再開させなければならない。現状では定番となっている会員の図書館訪問などリアルな集まりは難しいので、まずはメーリングリストでの情報交換から始め、オンラインでの交流など何ができるか考えたい。経験がない会員がいればZoomなどの入門編を兼ねてのオンライン会議やオンライン宴会から始めるのも良いだろう。今年度から来年度における活動、そして今後の千葉地域Gのあり方について率直に語り合っ活動の再開につなげたいところである。コロナ禍に沈み「大学図書館研究会」の

スタートにブレーキをかけることのないように努めたい。

(かとう・こういち／新潟大学学術情報部)

変わるもの、変わらないもの —大図研名称変更によせて、 東京地域グループから—

下山 朋幸

2020年10月に開催された第51回全国大会の際の会員総会にて、大図研の団体名の変更について審議された。その結果を受け、大図研は本年より「大学図書館研究会」として新たなスタートを切ることとなった。この全国大会は、当初は東京での開催が予定されており、私達東京地域グループでもそれに向けた準備を行っていた。だが、新型コロナウイルスの影響により、オンラインでの開催に切り替えられた。

思えばコロナ禍のこの1年、大学図書館を取り巻く状況にも大きな変化があった。緊急事態宣言によるキャンパス閉鎖や長期休館への対応、オンライン授業に伴う電子リソースの提供…など、例を挙げると枚挙に暇が無い。そして、先が見通せないまま急速な変化への対応を迫られ翻弄されたという大学図書館関係者の声を、多くの所で何度も耳にしたことだろう。

私達東京地域グループでも、昨年2月の例会を最後に会員同士が直に会うイベントを行っていない。その代わり、グループ主催のオンライン情報交換会を何度か開催し、特にコロナ禍への取り組みについての率直な声について話し合った。一連のこの会の中で、「大学図書館を取り巻く環境は変わり続けており、未来を考えることが必要だ」という声があった。つまり、見方を変えれば、大学図書館は常に変化にさらされている中、今は変化のスピードが速くなりすぎているだけ、というのが実情なのかも知れない。

大学図書館界隈が日々刻々と変わる中、今年より大図研の名称も変わる。だが、会員一人一人の、それぞれの状況を良くしたいという思いは変わらないはずである。それは自分自身、勤務館、あるいは所属機関、そして大学図書館界全体…のことと色々あるだろう。それぞれの未来を明るくするため、これから私達東京地域グループでも各自でできることから活動していきたい。

(しもやま・ともゆき／東京地域グループ)

これからの新しい一歩 —東海地域グループとして—

中川 恵理子

はじめに

東海地域グループは、前身の「愛知支部」から、「東海地域グループ」へと移行して5年目を迎える。本稿では、東海地域グループの近況を報告するとともに、地域グループとしての新しいスタートについて述べる。

東海地域グループの近況

東海地域グループは、愛知支部の頃より、「春の交流会」や図書館問題研究会愛知支部、中部図書館情報学会との合同イベントの開催を行ってきた。昨年は、愛知大学豊橋図書館及び東亜同文書院記念センター見学会を実施している。

また、今年度の東海地域グループの大きな変化として、長年全国委員を務めて下さった中島さんから、全国委員の変更があった。

東海地域グループの新しい時代にむけて

コロナ期の中で、日本の社会の在り方は急速に、大きく変化した。大学では、遠隔授業が通常となり、大学図書館では、非来館型のサービスの拡充が急務となっている。

東海地域グループでも、総会を初のZoom開催とし、コロナの中で対応した運営を行う

こととなった。今年度の東海地域グループのイベントは、現在予定していないが、実施する場合はリモートでの開催を考えたい。距離や時間の制約を超えたコミュニケーションツールの活用には、強いニーズとメリットを感じている。時代に対応した、新しいイベント開催や運営方式を目指していく。

ただ、世の中は変化しても、図書館という場所や図書館員の本質は変化しない。新しい全国委員として、今回の原稿を執筆するにあたって、過去の大図研会誌に目を通し、東海地域グループの歴史の長さを知った。新しい形式を取り入れながらも、東海地域グループの伝統のタスキをつなぐ。変化と伝統を大切にしながら、新しい大図研の東海地域グループとして、今出来ることから一歩ずつ歩みを進めていきたい。

(なかがわ・えりこ／東海地域グループ)

京都地域グループの 今までとこれから

安東 正玄

京都地域グループは、1978年10月21日京都大学附属図書館会議室で行われた「大学図書館員の集い」で結成した大学図書館問題研究会京都支部を母体とした組織です。

現在では50名を超える多くの会員が参加し、その中には大学図書館職員だけでなく、学生・教員・ベンダーなど多様な方がいて相互に交流を深めています。また京都は、大図研以外の図書館団体も非常に活発に勉強会を行っている土地柄であり、それら他団体の勉強会と時にはコラボレーションもしながら、互いに良い刺激を与えあって活動してるの大きな特徴です。

京都地域グループの活動内容としては、毎月の図書館関係のイベントをお知らせするメールマガジンの配信、隔月でのグループ報の刊行の他、年に2～3回、図書館界の最新

のトピックを扱ったセミナー等を開催し、毎回全国から多くの方にご参加いただいています。これからも新しい仲間を増やし、よりアクティブに活動していきたいと考えています。

また、京都地域グループでは、メーリングリスト「MLゆりかもめ」を運営しており、会員相互の親睦と交流を促進するためにも取り組んでいます。このメーリングリストは大図研の会員であれば、どなたでもご参加いただけますので、京都地域グループ以外の会員の方も大歓迎です。

京都地域グループでは、ホームページで情報発信もしていますので、是非訪問してみてください。

<https://www.daitoken.com/kyoto/>

(あんどう・せいげん／京都地域グループ)

大阪地域グループのこれから

小村 愛美

「大学図書館研究会」への名称変更という大きな区切りにあたり、大阪地域グループの活動方針や課題を今一度確認しながら、今後について考えたい。現在の大阪地域グループの活動方針は、以下の3点である。

- ・会員の交流促進に努める。
- ・ウェブを活用した広報・情報共有を進める。
- ・例会を開催する。

「会員の交流促進」、「ウェブを活用した広報・情報共有」に関わるものとして、ウェブの発信ツールがある。大阪地域グループでは、グループ内のメーリングリスト、ウェブサイト、Twitter、ブログを使用しており、活動の広報や報告などを媒体に応じて掲載している。ウェブの広報を見た非会員が例会に参加してくれることも時折あり、会員向けと外部向け双方への発信手段として、今後も重視したい。

「例会を開催する」は文字どおりの方針で、

1年に複数回例会を開催している。講師を招くこともあれば、参加者同士が情報を持ち寄って共有する場合もある。近隣の図書館へ、日帰りや1泊2日で見学に出かけることもあった。また京都・兵庫・大阪の3地域グループで合同例会も開催している。コロナ禍により集合形式や見学訪問は難しくなってしまったが、昨年はオンライン形式での情報交換も採り入れた。例会の開催は外部から最も見えやすい活動のひとつだと思うので、開催形式は柔軟にしながら、今後も参加者に有益なテーマを目指して開催していきたい。

グループの課題としては、やはり新規会員をなかなか得られず、会員数減少が続いていることが悩みである。大阪府には大小様々な規模の国公私立大学があり、図書館職員の雇用形態も様々であると思われる。求める情報のニーズを探りたいものの、非会員との接点をあまり持っておらず、勧誘の機会が少ないのが現状である。

その他にも様々な課題は感じているが、自分自身も含めて会員が楽しんで活動できるよう、親しみやすさや適度なゆるさを持って活動していきたいと考えている。

(こむら・いつみ／大阪地域グループ)

兵庫地域グループの再スタートとこれから

井上 昌彦

この度、本会が「大学図書館研究会」として再スタートを切りますこと、喜ばしく思います。呼び慣れた略称「大図研(だいとけん)」もそのまま変わらず用いることとなり、その点でも良かったと考えています。

名称変更に加え、本会結成50周年ということもあり、最近一部ではありますが、過去の当グループの支部報を、見返す機会がありました。

初期の支部報からは、結成当時の熱気や活

動の様子が、手書きの原稿(!)からありありと伺えます。兵庫地域グループの前身である兵庫支部は1979年に結成され、最盛期には五十余名の支部会員が在籍し、月一回程度活発な活動を行っていたようです。

その内容から当時取り組まれていたこと、課題として認識されていたことがよく分かり、感心させられたり、考えさせられたりしました。

ときには、かつて私たちの勤務先にお勤めだった先輩方のお名前を、支部報上に見つけることもありました。お会いしたことのない先輩方や、私たちとほぼ入れ違いに定年退職されゆっくりとお話しできなかった先輩方が、大図研に在籍し精力的に活動されていたことを知り、その情熱や行動力に感服しました。

改めて、50年に及ぶ当会の活動が、歴代の先輩方の努力と研鑽により、今に受け継がれていることを実感しました。こうした先輩方のご尽力を忘れることなく、気持ちを新たに活動していきたいと思えます。

兵庫地域グループは、以前より楽しみながら学ぶこと、会員相互の交流と親睦を深めることを基本スタンスとしています。近年、会員減少や各人の多忙により、十分な活動ができていない面もあります。

しかしながら、今後も基本的なスタンスを大切にしつつ、小規模であっても兵庫らしい活動を続け、学びを深めていきたいと考えます。

(いのうえ・まさひこ／兵庫地域グループ)

一歩一歩ゆっくりと — 広島地域グループより —

楯 幸子

今年度の広島地域グループは20名でスタートしました。2007年には会員数最大32名を数えたこともあります。それ以前は

25名前後、現在は20名前後と残念ながら少々減ったまま落ち着いています。地域グループ制になってからも研究会は広島市で開催されることが多く、同じ中国地方といえども気軽に参加できないことが原因かもしれません。オンライン研究会が増えた今は、逆に会員獲得の好機ととらえています。

当グループには、会員・非会員を問わず日常的に相談をする等アットホームな雰囲気がありますが、大図研全体から見るとやや内弁慶な印象も否定できません。会の名称を変更する際も、グループの活動自体が変わるわけではないためか、とくに異論が出ることもなく「大学図書館研究会」への変更を受け入れられました。

このようなグループですが、研究会の開催とともに継続しているのが1979年創刊の会報の発行です。最初は「大図研広島地区報」、それが「広島支部報」や「ひろしま支部報」になり、現在の「会報ひろしま」へと続いています。現在の名称は2016年に広島支部が広島地域グループに改編される時、今後グループの呼び方が変わったとしても長く使えるタイトルにしよう決めました。会報は季刊で、研究会に連動した特集記事の掲載や近況報告をおこなっています。100号や200号、名称変更といった節目の号には、現会員以外からも多くの原稿が寄せられました。

今後、大図研は「大学図書館研究会」と名称を変え、より研究を意識していきます。広島地域グループの研究会は、研究発表というよりは事例報告や意見交換が中心ですが、今後は一歩踏み込んで研究につながる内容になるよう工夫をしていきたいと思えます。のんびりとした広島らしく、すぐに変化は現れないかもしれませんが、これまでコツコツと研究会を重ね、会報を発行してきたように、変わる部分を前向きにとらえ、大切なことを守りつつ、これからも広島のペースで活動していきたいと思えます。

(かじ・さちこ／安田女子大学図書館)

これまでとこれからの 九州地域グループ

柿原 友紀

九州地域グループの前身である、福岡支部は1995年に結成された。大図研五十周年記念誌でグループの歴史を振り返る原稿を執筆するにあたり、福岡支部の支部報を読む機会があった。そこには、福岡支部結成時のメンバーの文章や、当時の例会の記録、福岡での初めての全国大会の準備から実施に至るまでの記録、西の果てネットワーク部隊の活躍等が書かれており、当時のメンバーの熱を感じることができた。福岡支部は、世代交代を重ねながらも、結成当時のメンバーの熱を受け継ぎ活発に活動を行ってきた。

福岡支部の歴史の中で大きな転換点は、支部制からグループ制への変更であった。単なる名称変更だけでなく、会費徴収方法の変更もあり、活動についても大きく変わってしまうような印象があったが、実際には大きく変わることはなかった。福岡支部から九州地域グループに至るまで、一貫して以下のポリシーを元にした活動を行ってきた。

【九州地域グループポリシー】

- ・自分を高める
- ・知らないことを知る
- ・知っていることを教える
- ・他の図書館の事例を参考とする
- ・問題解決のチャンスとする

今回、「大学図書館研究会」として新しい名称に替わるにあたって、九州地域グループは今まで変わらず活動していくことと思う。大切なのはグループとして活動し会員相互が繋がっていられるということ、例会を企画し同じ問題意識を持って集まれるということではないか。例会で取り上げるテーマや例会の開催方法等、時代に即して変わっていく面もあるが、ポリシーにかかわる部分は変わらずに活動していきたい。

コロナの影響で直接対面して例会を開催することができなくなったが、オンライン化によって地理的ハードルを乗り越え、より気軽に例会に参加できるようになったという面もある。例会がオンライン化したことにより、グループの垣根も超えて、他グループの例会に参加したりされたりすることも劇的に増加した。大図研が新しいステージに向かう今、名称変更はその象徴となり得るかもしれない。

(かきはら・ゆき／熊本大学)

「研究グループ」の目指すもの

田辺 浩介

学術基盤整備研究グループは、目録・電子リソースなど、図書館における学術基盤をテーマとした研究グループです。現在の定期的な活動としては、学術流通に関するブログのオンラインでの読書会を行っており、また全国大会ではCAT2020やJPCOARスキーマなど、参加者の関心が高いと思われるテーマを選んで、分科会を開催しています。

さて、この学術基盤整備研究グループは、「大学図書館研究会」という名前の組織の中で、さらに「研究グループ」と銘打って存在している集まりです。大学図書館問題研究会、そして大学図書館研究会のミッション・ステートメントに「課題の解決・改善の過程とその結果、独自に取り組んだ調査・事例報告・研究成果の情報発信」という文言がありますが、研究グループに特に期待されているのはこの点、つまり「発表」であると思っています。

もともと大学図書館には、大図研に限らず、数多くのコミュニティが存在しています。公的団体によって運営されるもの、大学や企業によって運営されるもの、学協会、私的な勉強会など、それぞれが目的を持って特色のある活動をしています。図書館の業務というの

□大学図書館研究会出版部 (出版物購入・問い合わせ窓口)

〒195-8585 東京都町田市金井ヶ丘5-1-1 和光大学図書・情報館気付

Fax: (044) 989-2250 E-mail: shuppan@daitoken.com

<出版物購入代金等振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00140-6-482205 大学図書館研究会出版部

三菱UFJ銀行 越谷駅前支店 普通口座: 1403054 大学図書館研究会出版部

□大学図書館研究会事務局

〒305-8550 茨城県つくば市春日1-2 筑波大学図書館情報メディア系 呑海研究室気付

E-mail: dtk_office@daitoken.com

<会費振込先> ゆうちょ銀行 振替口座: 00190-2-79769 大学図書館問題研究会

は、そのような多様なコミュニティの活動によって支えられ、育てられてきたはずです。そして、それらのコミュニティの関心を引きつけ、相互に結びつけるものが、まさに大図研、またこの研究グループが目標とする、研究活動の「発表」であると考えています。もちろん今までも全国大会での研究発表や分科会の開催は行ってきていますが、ある程度具体的なテーマを設定している研究グループとして、「自分の考えていることや興味のあることについて話してみたい」という気持ちを一人でも多くの方が持てるような活動に取り組んでいきたいと思っています。

(たなべ・こうすけ/物質・材料研究機構)

地域文化研究グループの 今後に向けて

中島 慶子

グループ制への移行を機に、様々な地域の文化を切り口として図書館のあり方を考える場があってもいいのではないかという思いを実現しようと、志に賛同してくださる発起人を募ったのが2018年のことでした。おかげさまで、当初は萌芽的研究グループとして発足したものの、言い出しっぺである筆者が諸事まごまごしているうちにデジタルツールに乗り遅れたことなどもあり、1年の空白期間を経てあらためて仕切り直し、目下のところ

大幅に遅れた船出に向けて準備の最中です。

今回再認識したのは、図書館は地域文化を支える存在であると同時に地域文化に支えられる存在でもあるということでした。図書館に直接関係する出版文化だけでなく、地域の食文化をはじめとする様々な生活文化なども広く視野に入れ、あらためて地域の共同体における図書館のあり方を探ることで、地域文化の継承や新しい時代の文化創造にいささかなりとも貢献できればと思います。もう一つは、毎年全国各地で開催される全国大会に関しても、研究グループとして何らかの形で貢献できるようになればと考えています。

奇しくも2019年末からのコロナ禍に伴い、リアルで集う代替手段としてオンラインコミュニケーションツールが普及、国内外問わずオンライン空間で集まることが容易になったのは、ある意味「福音」かもしれません。(尤も、実際に集まったのコミュニケーションがベストなのは言うに及ばずですが…)

全国の様々な地域の大学をはじめ図書館関連に所属される会員の皆様にも、準備が整い次第、あらためて呼びかけをさせていただきたいと思いますので、地域文化と図書館を結ぶ取り組みなどに興味や関心のあるベテランはじめ次代を担う中堅・若手各位のご参加を心よりお待ちしております。

(なかじま・けいこ/

豊橋創造大学附属図書館)